

「サヨナラニッポン！」

相馬
光

登場人物

岩田 昭一郎 (42) ……建設会社課長補佐
矢部 あすか (24) ……建設会社派遣社員

岩田 大河 (12) ……小学生。昭一郎の息子
岩田 慶子 (41) ……専業主婦。昭一郎の妻

貝塚 寛平 (51) ……建設会社課長
神谷 真志 (42) ……入院患者

坂本 晴臣 (62) ……日本文理大学史学科教授

ゼミ生
ラジオの声

○建設現場

ヘルメットを被った矢部あすか（24）
が白いハンカチで包まれた何かを両手
で抱えて小走りしている。

○同・事務所内

プレハブの事務所。

散らかったデスクで電話に出ている岩

田昭一郎（42）。

昭一郎「はい、課長のおかげで順調に進んで
おります。工期通りに終わらせますので」

あすか、ヘルメットのまま昭一郎の方
へ歩いてくる。

昭一郎「昨日の会議の資料は……ええと」

反対側の机にある書類の山に手を伸ば
すが届かない。

電話を引っ張り、椅子を傾けて書類を
取ろうとする。

あすか「課長補佐」

引っ張り過ぎて受話器のコードが抜け

る。

昭一郎「あっ！」

椅子が傾いて倒れる。

書類の山が雪崩となって、昭一郎を埋める。

あすか「日本の歴史が、変わります」

起き上がり、顔だけ出す昭一郎。

昭一郎「……へ？」

あすか、白色のハンカチを開く。

中にはいくつかの石片。

何が何だかわからない昭一郎の顔。

○タイトル「サヨナラニッポン！」

○岩田家・居間（朝）

社宅の一室。

岩田大河（12）と岩田慶子（41）がご飯を食べている。

寝室から出てくるパジャマ姿の昭一郎。椅子に座り、新聞を開く。

クロスワードパズルが埋まっている。

昭一郎「あれ、これ……」

大河「埋めといたよ」

昭一郎「これは父さんが」

慶子「あんたいつつも最後まで埋まらないじ

やない」

昭一郎「これね、難しいんだよ」

慶子「大河は三十分で解いてたよ」

昭一郎「本当かあ？（クイズを読んで）中

米、世界一美しい鳥ケツアールがいる国」

大河「（即答で）コストリカ。首都はサンホ

セ」

昭一郎「何で知ってるんだ」

慶子「社会得意だからねえ。歴史も大好きだ

し。誰かさんと違って」

昭一郎「俺はね、歴史好きだよ。でもね、歴

史が俺を好きじゃないの」

大河「ごちそうさまでした」

大河、皿を下げて洗面所へ行く。

慶子「サンホサだって。親近感わくね」

パックの納豆を開ける昭一郎。

昭一郎「サンホセだよ。わざと間違えるなよ」

ビニールの醤油を開け、納豆にかけて

かき混ぜる昭一郎。

慶子「上手く行けば補佐取れるって言ったけどどうなの？」

昭一郎、ご飯に箸で穴を開けて、納豆を入れる。

慶子「補佐が取れても増えても良いけど、私立に行かせられるだけのお給料もらえるようにしてね」

昭一郎、食べようとするが納豆の中に醤油のビニール片が入っているのに気づく。

慶子「あと、温活っていうの？ 汗かくのが良いみたいで、ジムの会員に……」

ビニール片を手取る昭一郎。

○建設現場・事務所（回想）

前シーンのビニールのように石片を手

取る昭一郎。

ヘルメットを被ったままのあすか。

昭一郎「矢部さん、とりあえずヘルメット脱
ごうか」

あすか「課長補佐、土器です」

昭一郎「……この石が？」

昭一郎、触ろうとする。

あすか「課長補佐！ この石は青森の大平山
元遺跡よりも前の可能性が……」

昭一郎「ちよ、ちよつと落ち着こうか」

あすか「一刻も早く貝塚課長に連絡を……」

昭一郎「ほら、ヘルメット脱いでさ」

あすか「それか、大学時代の教授に連絡をし
て確認を」

昭一郎「矢部さん！ 一旦落ち着こう！」

あすか「この歴史的発見を目の前に落ち着い
ていられますか？」

昭一郎「そ、そうかもしれないけど……ひと
まず、預かって良いかな？」

あすか「……預かる？」

昭一郎「うん、今日のところは一旦預かって、明日課長来るからその時に話してさ」
あすか「見つけたら速やかに届け出る決まりですよね」

昭一郎「うん、そうだけどね。ほら色々確認しなきゃいけない事とかもあるしさ」

昼休みのチャイムが鳴る。

昭一郎「あ、昼休みだ！ とりあえずご飯食べよう。ね！」
不服そうに昭一郎を見つめるあすか。

○バス・内（回想戻る）

混み合っている朝のバス。

虚ろな目で座席に座り、窓にもたれている昭一郎。

停車し、作業着の人が降りて行く。

ドアが閉まり走り出す。

ハッとする昭一郎。

窓越しに建設現場に入って行く作業員の後ろ姿を見つめる。

○同・屋外喫煙所

ヘルメットを被った貝塚寛平（51）が
タバコを吸っている。

隣で立っている昭一郎。

手にはあすがが持っていたハンカチ。

貝塚「課長補佐、コストリカって知ってる？」

昭一郎「中米の……ケツァール？　がいる国、
ですよね」

貝塚「詳しいね。地理とか得意なの？」

昭一郎「いや、たまたまです」

貝塚「二課の藤村、行くんだって。君の同期
だろ」

昭一郎「えっ……」

貝塚「新規事業開発部長……大出世だね」

昭一郎「でも、この歳で海外なんて……」

貝塚「まあ、もう戻れないだろうね」

貝塚、煙を吐く。

貝塚「虚偽申請だってさ。何でこういう事し
ちゃうのかねえ」

昭一郎、固まる。

貝塚「上司の嬉野さんもベトナム行ったって。

二人揃って、サヨナラニッポン」

昭一郎「あ、あの課長……」

貝塚「課長補佐。昨日の電話、本当心強かったよ」

昭一郎「あ、いやあ……昨日は途中で電話が切れてしまいすみませんでした」

貝塚「良いの良いの。順調だって聞いて良かった」

昭一郎「はあ……」

貝塚「会長のご子息の家だからね。工期も予定通りじゃないと僕ら……」

タバコを灰皿に押し付ける貝塚。

貝塚「ま、これが上手くいけば課長補佐の補佐も取れるし、僕も部長だ」

昭一郎の肩を叩く貝塚。

貝塚「踏ん張りどころだよ、頑張ろう！」

何とも言えない顔で笑いながらそつとハンカチをポケットにしまう昭一郎。

○同・会議室

小さな会議室。

ヘルメットを被ったあすかが昭一郎を
睨んでいる。

あすか「どうして話さなかったんですか」

昭一郎「いや、こういうのってタイミングつ
てもものがあるからさ」

あすか「速やかに届け出ないと」

昭一郎「でもさ。出たの昨日のアレだけでし
よ？」

あすか、土器らしきものが包まれた灰
色のハンカチを出す。

昭一郎「ま、また出たの……？」

○バス停（夜）

バスから降りる数人。

昭一郎がしよぼくれた顔で歩く。

その横を通り過ぎて行く大河。

昭一郎「大河、同じバスだったのか。声かけ
ろよお」

大河、返事せず昭一郎を見つめる。

○道

閑静な住宅街。

並んで歩く昭一郎と大河。

昭一郎、鞆をゴソゴソと漁る。

昭一郎「そうだ、今日帰りにクロスワードの

本買ったんだ。後で一緒に……」

大河「お父さん、やりたい事ある？」

昭一郎「そりゃあ、大河を私立に行かせて、

ジムの会員に……」

大河「それはお母さんのやりたい事でしょ」

昭一郎「まあでも母さんと大河のやりたい事

は俺のやりたい事でもあるんだよ」

大河「じゃあ他には？」

昭一郎「ええ、何だろな。大河は何かあるの

か？アレか、プロクロスワード解きか？」

大河「ないよ、そんな仕事」

昭一郎「ないよなあ、そうだよなあ」

黙って歩く昭一郎と大河。

昭一郎「でもまあ、この時間まで塾行って、

本当よく頑張ってるよ。すごいぞ」

大河「そうかな」

昭一郎「きっと良い大学入れるぞ」

大河「そしたらどうなるの？」

昭一郎「良い会社入って、バリバリ働いて、

お父さんみたいになれるからな」

大河「（すごく不安そうに）……えっ？」

昭一郎「な、何だよそんな顔して……冗談だ

よ、冗談。大河は大河だから」

ホッとして、先に歩いて行く大河。

立ち止まり大河の後ろ姿を見つめる昭

一郎。

○岩田家・居間

風呂上がりの昭一郎、ビールの缶を開ける。

ソファでクロスワードを解く慶子。

慶子「埋蔵文化財が存在する事で広く知れ渡っている土地の名前は？」

飲みかけたビールを吹き出す。

昭一郎「（口を拭きながら）……包蔵地ほうざうち」

慶子「へえ、さすが建設業の課長補佐」

昭一郎「それ、大河にあげたやつだぞ」

慶子「大河がやって良いって。面白いね、ク
ロスワードって」

昭一郎、大河の部屋の方を見る。

閉じているドア。

慶子「建設前に遺跡があるかどうかを調べる

小規模な発掘は？」

あすかの声「試掘しくつ、ですか」

○建設現場・会議室（日替わり）

頭を抱えている昭一郎。

対面に座るヘルメットを被ったあすか。

昭一郎「そうだよ、試掘してなかったっけ？」

あすか「いえ、したはずです」

机に土器の包まれた黒色のハンカチが
置かれている。

昭一郎「ここ、包蔵地じゃないよね」

あすか「包蔵地でなくても出る事は珍しくあ
りません」

昭一郎、ハンカチの中の土器を見つめる。

昭一郎「何で次から次へと出るかなあ……」

あすか「それだけ凄い場所なんですよ！」

昭一郎「（小声で）このままじゃ補佐も私立もジムも」

あすか「え？」

昭一郎「あ、いや……」

あすか「これだけ出たんです。もうさすがに言わないと」

昭一郎「怒られるかなあ……」

呆れるあすか。

あすか「（投げやりに）大丈夫じゃないですか？」

○同・屋外喫煙所

昭一郎に詰め寄る貝塚。

貝塚「何でもっと早く言わなかったんだ！」

昭一郎「（反射的に）すみません！」

貝塚「報連相は社会人の基本だろ！ 何十年

会社員やってんだよ！」

深々と頭を下げる昭一郎。

貝塚「……って怒鳴られちゃうよお。僕じゃなかったら」

昭一郎、顔を上げる。

貝塚、タバコに火をつける。

貝塚「今の所、気づいてるのはその、矢部さんって派遣の娘だけ？」

昭一郎「……はい」

貝塚「アレが出ちゃうとさあ、工事止めなきゃいけないんだよねえ。調査費用もこっち持ちだし」

貝塚、煙を吐く。

昭一郎「工期は……」

貝塚「間違いなく、間に合わないだろうね」

昭一郎「……そ、それじゃあ」

貝塚「どうにか僕らで乗り切らないと」

昭一郎「の、乗り切るって、どうすれば」

貝塚、タバコを灰皿に押し付ける。

貝塚「実はね、初めてじゃないんだ」

灰皿の中央の穴にタバコを落とす。

○同・事務所前

思いつめた表情で歩く昭一郎。

貝塚の声「矢部さんの言う通り、出てくる事

は『よくある事』なんだよ」

備品のチェックをしているあすか。

貝塚の声「僕が若い時にもあったんだ。それ

もまた工期厳守のやつだね」

あすかの前で立ち止まる昭一郎。

貝塚の声「その時の上司に言われたのは……」

○同・会議室

向かい合って座っている昭一郎とヘル

メットを被ったままのあすか。

昭一郎「勘違いだよ。土器は無いんだ。もう

この事は忘れて、仕事に集中しよう」

あすか「そ、そんな……課長は！」

昭一郎「貝塚課長も、同じ考えだ」

あすか、拳を握りしめて俯く。

昭一郎「矢部さん、確かに日本の歴史は大切だよ」

白色のハンカチを開く昭一郎。

昭一郎「でもね、この仕事はね、お客様からのご依頼ありきで成り立つ仕事なんだ」

灰色のハンカチを開く。

昭一郎「工期が遅れたらお客様に迷惑がかかる。だからこれはね……」

黒色のハンカチを開こうとする。

あすか「（小声で）ルーマニア、ペルー、エジプト」

三枚のハンカチを順番に指差す。

昭一郎「……え？」

あすか「父がくれた、お土産なんです」

昭一郎「そうか……色んな国に行ってるんだね。商社マン？」

あすか「……考古学者、でした」

昭一郎、動きが止まる。

あすか「家にもほとんど帰って来ないし、帰って来ても論文書いたりで全然遊んでもら

えなくて」

昭一郎、あすかを見つめる。

あすか「それでも、ニュースや新聞で父の顔が写っていると嬉しくて、切り抜いて友達に自慢して。でも……」

あすか、土器を見つめる。

あすか「私が中学一年の時に、調査中の洞窟で大きな落盤事故があつて」

昭一郎「まさか……」

あすか「聞きたい事も話したい事あったのに……ある日、父の論文を読んで」

あすか、窓の外を見る。

あすか「私も同じ景色を見てみたいって思つて、大学で考古学勉強して」

昭一郎、じつと見ている。

あすか「でも就職失敗しちゃつて。それで派遣でここに来て……これ、見つけて」

あすか「（哀しく笑つて）父の様な人に、なりたかつた……」

席を立つあすか。

昭一郎「矢部さん……」

あすか「（背を向けたまま）『良くある事』、
なんですよね」

昭一郎、答えられない。

あすか「……お騒がせしました」

出て行くあすか。

○同・事務所（夜）

昭一郎と貝塚だけがいる。

机にはビニール袋にまとめられた土器。

貝塚「課長補佐、ご苦労だったね」

昭一郎「いえ、そんな……」

貝塚「でも補佐が取れたらこういう仕事ばかりだよ。まあ、予行練習だと思ってさ」

金庫を開ける昭一郎。

貝塚「（袋の中を見て）これがねえ……矢部

さんもよく気付いてくれちゃったねえ」

昭一郎「大学で考古学をやっていたそうです」

貝塚「そっかあ。大発見だったのにねえ。でも、こうしないと……ね？」

昭一郎、応えずに黙々と袋を金庫の奥に入れる。

貝塚「まあ処分は後々考えようか」

金庫を閉じ、鍵を閉める昭一郎。

昭一郎「鍵は、私が」

貝塚「うん、僕もスペアは持ってるから。ま

た何かあったら今度はすぐに連絡してよ」

昭一郎「……は、はい」

貝塚「よし、じゃあ今日は奢るよ！ 飲みに行こう！」

○公園・前（深夜）

泥酔で歩く昭一郎。

滑り台が目に残る。

○同・滑り台

フラフラとした足取りで登る昭一郎。

星の無い夜空を見上げる。

○岩田家・大河の部屋

勉強している大河。

ふと窓の外を見る。

滑り降りようとするが上手く滑れず笑っている昭一郎の姿。

呆れた目で一瞥し、机に向かう大河。

笑っている様にも泣いている様にも見える昭一郎の後ろ姿。

○社宅・階段

よろよろとした足取りで登る昭一郎。

○岩田家・玄関

鍵を開け、倒れこむ昭一郎。

顔にパツクした慶子が出てくる。

慶子「お父さん、何してんの……やだ！ 砂

だらけ！ 何で？ ねえ何で……」

昭一郎、眠っている。

ため息をついて、靴を脱がす慶子。

砂がドサツと出る。

○同・居間（日替わり）

ご飯を食べている大河と慶子。

ボサボサの昭一郎が席に着く。

昭一郎「おはよう」

大河・慶子「ごちそうさまでした」

二人とも席を立つ。

昭一郎「何だよお……」

一人でご飯を食べ始める昭一郎。

○建築現場・事務所

昭一郎がデスクで書類を探している。

あすかが入る。

昭一郎「……おはよう」

あすか、無視して自分の席に着く。

○同・男子トイレ

小用を足している貝塚。

虚ろな目の昭一郎が隣に立つ。

昭一郎「おはようございます」

貝塚「いやぁ同士よ！ 昨日は飲んだねえ。」

まだ残ってるよお」

『同士』と言う言葉にビクツと反応する昭一郎。

貝塚、手洗い場へ移る。

貝塚「午後の会議の資料、後でちようだいね」

濡れた手を雑に振って出て行く貝塚。

ため息をつく昭一郎。

昭一郎「……あれ？ あっ、痛い！」

悶える昭一郎。

昭一郎「（絞り出す様に）だ、誰か……聞こえる？」

便器に思い切り足をぶつけ派手な音が

鳴る。

昭一郎「痛い！ 足も痛い！ ああっ、イタ

タタタタ！」

倒れて悶絶する。

○病院・病室

ベッドで寝ている昭一郎。

包帯で巻かれた右足が器具で吊られて

いる。

目を覚ますとヘルメットを被ったあすか。
か。

昭一郎「矢部さん……」

あすか「課長補佐！ 良かったあ……トイレ

から叫び声聞こえたので何事かと」

昭一郎「あのさ……」

あすか「足、痛みますか？ それとも……」

昭一郎「ヘルメット」

あすか「あつ！ すみません！ 慌ててたので、取り忘れちゃって……」

あすか、ヘルメットを外す。

昭一郎、右足を見つめる。

あすか「右足は折れちゃってるので、全治一

ヶ月だそうです。あと、その……」

昭一郎「……えっ、何か悪い知らせ？」

あすか「いえ、石が……」

昭一郎「ま、また出たの？ 今度は何の土器」

あすか「（遮って）違います。課長補佐の中

に、石が……」

○同・前（夕方）

タクシーから降りる慶子。

小走りで中に入って行く。

○同・病室

寝ている昭一郎の横に二リットルのペ

ットボトルを何本も置く慶子。

慶子「ひたすら水飲んで押し出す、それしかないよ」

起き上がりペットボトルを開ける昭一

郎。

昭一郎「大河は？」

慶子「模試。この後迎えに行くから」

昭一郎「そうか、わざわざ悪いな」

慶子「つたくもう石くらいで大騒ぎして骨折

って……」

昭一郎「石くらいって……すごい痛みなんだぞ」

慶子「（着替えを出しながら）ああそう。良

い年して砂場で遊ぶから石なんて出来ちゃ
うんだよ」

昭一郎「砂場遊びなんて……」

慶子「こないだ砂だらけだったじゃない。あ、
あとこれ。ほとんど解いちやっただけ」

クロスワードパズルの本を置く。

昭一郎「解き終わったクロスワード見てどう
すりゃいいんだよ」

慶子「まだあとちよっと残ってるから。それ
じゃ」

昭一郎「も、もう行くの？」

慶子「もうすぐ模試終わるからね。また何か
必要な物あったらメールして」

颯爽と出て行く慶子。

呆然と見送る昭一郎。

隣のベッドのカーテンが開く。

神谷真志（42）がベッドから体を起こ
してニヤニヤしながら見ている。

神谷「さっきから面白い人ばっか来るね」

昭一郎「……うるさかったですか？」

神谷「いやいや、羨ましいんだよ。俺んこには誰も来ないからさ」

昭一郎「は、はあ……」

神谷「俺、神谷ってんだ。よろしく」

腰を抑えながら手を伸ばす。

昭一郎「岩田です」

握手する昭一郎。

昭一郎「腰、ですか？」

神谷「座り仕事なんだけどさあ、たまにお客さんの荷物持ったりするんだよね。それで、ギツクリと」

昭一郎「ギツクリ……」

神谷「骨折も大変だけど、石は本当辛いよな。俺もやったよ。あとね、この前……」

神谷の勢いに圧倒される昭一郎。

○岩田家・居間

雑誌を読む慶子とクロスワードをする

大河。

大河「お父さんって若い頃どんな人だったの」

慶子「何、いきなり」

大河「いや、何か気になって」

慶子「（小さく笑って）不器用だったよ」

大河「へえ」

慶子「自分でこうだって決めたら何があっても曲げられない人だった」

慶子、雑誌を置く。

慶子「クロスワードって、キーワードの近く

だけ解けば終わりじゃん？」

大河「うん」

慶子「でも問題作ってくれた人に悪いからって全部解くの」

大河、笑う。

慶子「でも『しょうがない』って言葉が増えてきて……今はあんな感じ」

大河「あんな感じかあ……」

棚に飾られた家族写真を見る。

大河「昔のお父さん、想像つかないなあ」

慶子「でしょ。人に歴史あり、だよ」

大河「今頃どうしてるかな」

慶子「のんびりやってんじやない？ 久々に一人きりで静かな所にいるんだから」

○病院・病室

ぐったりしている昭一郎。

前のめりでヒートアップしている神谷。

神谷「それでさあ、俺言っただけだよ。納得いかねえって。で、本社に直訴よ」

神谷「言っちゃえばこれ、『神谷の乱』。でもよ、どういう訳か俺が左遷なの」

昭一郎「は、はあ……」

神谷「それで頭きたから会社辞めて、そして家族にも逃げられて、なあんも無くなつたの」

昭一郎「あの、もうそろそろ」

神谷「（聞かずに）でもね、不思議と後悔してねえんだよな」

昭一郎、動きが止まる。

神谷「正しい事したいとかそういうんじゃない。えんだ。ちゃんと自分に気持ちいい風を吹

かせたかったんだよな」

昭一郎「……風かぁ」

神谷「何か俺、今いい事言った？ メモしといて、メモ。あ、もうこんな時間だ、寝よ」

神谷、布団に倒れると三秒以内でいび

きが聞こえる。

昭一郎「（呆れつつも感心して）良い生き方してるなあ……イテテテ」

下腹部を抑えて寝る昭一郎。

○病院・ロビー（日替わり）

松葉杖で歩く昭一郎とあすか。

昭一郎、無精ヒゲが伸びている。

あすか「今日でもう一週間ですな」

昭一郎「毎日来なくても良いんだよ。大変でしよう？」

あすか「課長から進捗報告をしてくるように頼まれているんで」

昭一郎「……順調かい？」

あすか「……はい」

昭一郎「そうか」

あすか「課長、来られなくて申し訳ないって」

昭一郎「いやあ、俺の分もやってくれてるからね。しょうがないよ」

何となく、間ができる。

昭一郎「あ、ハンカチ」

あすか「はい？」

昭一郎「土器包んでくれていた、お父さんの……」

あすか「ああ」

昭一郎「ちゃんと洗濯したんだ。家内に持って来させるから」

あすか「良いですよ、いつでも」

昭一郎「でも、大切なものじゃ……」

あすか「課長補佐。実は私、この仕事を……大荷物を抱えた私服の神谷が歩いてくる。

神谷「岩っち！ここにいたのかあ」

昭一郎「神谷さん」

神谷「（あすかに）あ、ども」

あすか、お辞儀する。

神谷「俺、今日で退院だから」

昭一郎「えっ、そうなんですか！」

神谷「そうだよオ、何回も言ったじゃん！

全然聞いてないんだから」

岩田「すいません。でももう退院とは……」

神谷「岩っちが来るひと月前から入院してん

だよ。ようやくだよ」

昭一郎「そうでしたかあ」

神谷「明日から早速仕事復帰よ。バリバリ働

かなきゃねえ」

昭一郎「短い間でしたが、ありがとうございます

ました」

礼をする昭一郎。

神谷「おう！ また会えたら会おう！ じゃ

あな！」

出て行く神谷。

昭一郎「風というより、嵐みたいな人だった

なあ……（あすかに）ごめん、何だっけ？」

あすか「（笑って）いえ、何でもないです」

○同・病室（深夜）

消灯した寝室。

ベッドで横になっている昭一郎。

神谷がいたベッドを見る。

綺麗に整頓されている。

何となく静けさに落ち着けない。

貝塚の声（回想）「ま、上手くいけば課長補

佐の補佐も取れるし、僕も部長だ」

寝返りを打つ。

あすかの声（回想）「『良くある事』、なん

ですよ」

起き上がり、ペットボトルの水をぐい

っと飲む。

○同・廊下

真っ暗な廊下。

慶子の声（回想）「補佐が取れても増えても

良いけど、私立に行かせられるだけのお給

料もらえるようにしてね」

松葉杖で歩く昭一郎。

あすかの声（回想）「父の様な人になりた
かったなあ……」

○同・トイレ

恐る恐る小用の便器に立つ昭一郎。

大河の声（回想）「お父さん、やりたい事あ
る？」

目を瞑る昭一郎。

神谷の声「正しい事したいとかそういうんじ
やねえんだ。ちゃんと自分に気持ちいい風
を吹かせたかったんだよな」

『カラン』と陶器に何かが当たる音。

昭一郎「（目を開けて）……あっ、出た！

これが！（思わず飛び跳ねて）やった！
……痛っ！」

右足を押さえる昭一郎。

痛みに目を潤ませながらも笑っている。

○同・病室（日替わり）

あすかが入る。

無精ヒゲを剃った昭一郎がクロスワードパズルをやっている。

あすか「課長代理、ヒゲ剃ったんですか」

昭一郎「ああ。ごめんね、今までだらしなかつたよね。あ、そうだ！」

昭一郎、バッグから綺麗に畳まれたハンカチを出す。

昭一郎「これ、返すよ。遅くなってごめんね」

あすか「（受け取って）ありがとうございますます」

クロスワードパズルを見るあすか。

字が少し子供っぽい。

あすか「それ、お子さんの字ですか？」

昭一郎「そうそう。ほとんど解かれちゃったんだよ」

あすか「じゃあお楽しみ全部持ってかれちゃったんですね」

昭一郎「（笑って）そうなんだよ。でもね、これ解くより、見てる方がよっぽど楽しい

よ」

あすか、昭一郎を見つめる。

昭一郎「あんなに小さかったあいつがこんな難しい問題も解けるんだって思うと、何か嬉しいんだよね」

照れ笑いする昭一郎。

あすかも小さく笑う。

昭一郎「……俺さ、こないだ子供に『勉強いっぱいすれば、お父さんみたいになれる』って言ったんだよ」

あすか「はい」

昭一郎「そしたらすんごい不安そうな顔してた（と言って笑う）」

反応に困るあすか。

昭一郎「家族のために頑張ってたつもりだったんだけどさ」

俯く昭一郎。

昭一郎「結局それを言い訳に、色んな事をなあなあにしていたんだよなあ」

掛け布団をぎゅっと抱む。

昭一郎「風が吹いても、気づかないふりして、いつの間にか本当に気付けなくなってた」

神谷がいたベッドを見つめる。

昭一郎「矢部さんが『父の様な人に、なりたかった』って言った時にようやく気付いた」

あすか「えっ……」

昭一郎「部下にこんな言葉を言わせて、何て酷い上司なんだ、上司失格だって」

あすか、昭一郎を見つめている。

昭一郎「本当にすまなかった」

深々と頭をさげる昭一郎。

あすか「そ、そんな……」

昭一郎「それで実は」

顔を上げる昭一郎。

昭一郎「『岩田の乱』、起こそうと思う」

昭一郎、金庫の鍵を出す。

あすか、身を乗り出す。

あすか「まさか……」

昭一郎「矢部さんに頼みたい事があるんだ」

あすか「課長補佐……」

昭一郎「やっぱ、やめた方がいいかな？」

あすか「『乱』じゃなくて、『変』です。」

『乱』だと失敗したことになっちゃうので」

昭一郎「そ、そうなんだ……！」

○同・前

玄関から走り出すあすか。

嬉しさを堪えきれず少し笑っている。

慶子と大河が通り過ぎる。

○同・屋上

松葉杖で歩く昭一郎。

慶子と大河が後をついてくる。

大河「どうして屋上なの」

慶子「『私が犯人でした』って告白？」

昭一郎「（笑って）そんな感じだな」

昭一郎、慶子と大河を見る。

昭一郎「補佐、取れないかもしれない」

慶子「ハア？」

昭一郎「取れないどころか、降格も……」

昭一郎の携帯が鳴る。

昭一郎「だけどな、風が吹いたんだ。それで

『岩田の変』を……」

電話、鳴り続けている。

大河「お父さん、一度電話出してくれないかな」

慶子「音が気になって内容入ってこないの」

昭一郎「すまん。（電話に出て）はい、岩田

です……ああ、ありがとう。えっ……」

○建設現場・事務所

通話しながら金庫の中を見ているあすか。
あすか「土器が……ありません」

金庫の中のビニール袋が無くなっている。
る。

○病院・屋上

訳がわからないという表情の昭一郎。

昭一郎「ど、どういう事だ……あっ！」

○建設現場・事務所（回想）

金庫を閉じ、鍵を閉める昭一郎。

横で見ている貝塚。

昭一郎「鍵は、私が」

貝塚「うん、僕もスペアは持ってるから」

○病院・屋上（回想戻る）

心配そうに見ている慶子と大河。

慶子「何、どうしたの？」

昭一郎「ま、また掛け直す！ 引き続き、動

いてくれ、頼む！（電話を切る）」

再び電話をかける昭一郎。

慶子「またかけるの？ 聞いている？」

昭一郎「（電話に）お疲れ様です。岩田です」

○タクシー・車内

後部座席に座っている貝塚。

貝塚「岩田課長補佐、久しぶりだね。ごめん

ね、お見舞い行けなくて」

昭一郎の声「課長、今どちらに？」

貝塚「今タクシーだよ。これから出張行くの。

旭川まで。遠いよね」

昭一郎の声「あ、あの！　つかぬ事をお聞き
しますが、土器って……」

貝塚「ああ、ごめんね！　緊急だったからさ」

昭一郎の声「緊急……？」

貝塚「ある筋の人にコレの話したらさ、是非
とも見せてくれないかって」

鞆から見える土器の入ったビニール袋。

貝塚「本物だったら百万だって」

貝塚、土器の数を指で数える。

貝塚「もし売れたら五十万ずつだね。僕と課

長補佐だけの秘密だよ」

○病院・屋上

固まっている昭一郎。

貝塚の声「あ、ごめん。ちよつと充電が（電
話が切れる）」

ふらつきながら走り出す昭一郎。

大河「お、お父さん！」

慶子「松葉杖忘れてるよ！」

訳がわからないまま後を追う慶子と大河。

○同・階段

痛みに顔を歪めながらも降りて行く昭一郎。

慶子「ほら、屋上なんか呼び出すから！」

大河「そんな事言っていないで、支えないと！」

昭一郎の肩を支える大河。

慶子も追いついて支える。

○同・外

片足を引きずりながら出てくる昭一郎。

慶子「お父さん！ 寝巻きで出ちゃダメ！」

昭一郎「タクシー！ タクシー停めて！」

昭一郎、必死で手を挙げる。

タクシーが一台停まる。

○タクシー・内

昭一郎と慶子と大河が乗る。

昭一郎「羽田まで！なるべく急いで！」

運転手の声「は、はい」

車、走り出す。

大河「入院中なんだよ、今は仕事なんか休みなよ！」

昭一郎「これは仕事だけど、仕事じゃないんだ」

大河「何なの、それ」

慶子「お願いだからちゃんと説明して」

○道路

昭一郎たちを乗せたタクシーが走って行く。

少し遠くに羽田空港が見える。

○タクシー・車内

昭一郎を見つめる慶子と大河。

慶子「……何で黙ってたの」

昭一郎「言える訳ないだろ、土器隠したなんて」

慶子「でも言った」

昭一郎、小さく頷く。

昭一郎「私立とジム、諦めてもらうかもしれ
ない」

昭一郎の顔を見つめる大河。

大河「……いいよ」

昭一郎「い、いいのか？」

慶子「黙って言う通りにすれば、昇進出来て、
五十万ももらえんのに……」

大きくため息をつく慶子。

慶子「コストリカって暑いのか？」

大河「年中真夏だよ」

昭一郎「まだコストリカって決まった訳じゃ

……」

慶子「どこいてもサウナ、か」

昭一郎「俺だけ行けばいいよ。慶子と大河は

東京で」

慶子「（呆れながら）何言ってるの。どこま
でもついて行きますよ」

慶子、車窓を見る。

慶子「家族だもの」

呆れつつも嬉しそうな表情。

○羽田空港・ターミナル前

タクシーが停まる。

○タクシー・車内

ドアが開く。

慶子「あっ、財布！ 病室に置きっ放し！」

昭一郎「何でだよお……」

慶子「だってすぐ終わるって言ったじゃない」

昭一郎「そもそも俺、この格好だし……」

大河「僕、千円だったらあるよ」

運転手の声「あーもう！ いいから、早く行

け！」

振り返る運転手、神谷。

昭一郎「す、座り仕事って……」

神谷「岩っち、何が何でも取り返して来い」

強く頷く昭一郎。

よくわからないまま頷く慶子と大河。

○同・一階ロビー

慶子、大河が辺りを見回している。

昭一郎、電話している。

昭一郎「あと、どれぐらいで着きそうだ？

わかった、見つけたらまた……」

エスカレーターに乗って上の階に行く

貝塚。

昭一郎「い、いた！」

足を引きずり走る昭一郎。

○同・二階ロビー

チケットを確認している貝塚。

エスカレーターから次第にせり上がっ

てくる寝巻き姿の昭一郎と慶子と大河。

昭一郎「貝塚さん！」

貝塚「ど、どうしたの？ 入院してるんじや

……そちらさんは？」

昭一郎「（息を切らせながら）妻と息子です」

お辞儀をする慶子と大河。

貝塚「な、何だい？ 見送りかい？」

昭一郎「あの、土器を返してください！」

貝塚「（周囲を気にして）どうした課長補佐、

声が大きいぞお」

昭一郎「やはり、葬り去るのはいけません。

きちんと調べてもらうべきです」

昭一郎、貝塚の前に立つ。

貝塚「そりゃあ、そうだ。だから調べてもら

いに行くんだよ」

貝塚、強引に横から行こうとする。

貝塚「本物かどうかちゃんと見てもらうんだ。

別に今ここで課長補佐に渡す必要はないよ

ね？」

慶子が立ちほだかる。

貝塚「第一、返してくださいなんておかしな

話だ。課長補佐のものじゃないだろう！」

貝塚、踵を返すと大河が立っている。

貝塚「家族総出で来て、半ば脅迫の様にこの

土器を奪おうとして、失礼にもほどがある

だろ！」

苛ついている貝塚。

貝塚「奥さん、坊ちゃん。僕はね、一企業人として、土器にとっても我々にとっても一番平和に解決出来る方法をとっただけです」
強引に慶子と大河の間を抜ける貝塚。

貝塚「もしここですぐに専門家を呼んで調べられるなら渡しますよ。（笑って）まあ、そう言う訳にはいかないでしょうし……」

昭一郎、言い返せない。

貝塚「（時計を見て）おっと、そろそろ時間なんでね。課長補佐、お大事にね」

背を向けて歩き出す貝塚。

○同・搭乗口前

チケットを出す貝塚。

昭一郎の声「課長！ 専門家、来ましたよ！」

貝塚「（振り返って）はあ？」

エスカレーターからあすかが登ってくるのが見える。

あすかの後ろに十人ほどの男女がつい

て来ている。

貝塚「矢部さん……？」

貝塚の前に立つあすか。

あすか「こちらは私の母校、日本文理大学史学科の坂本教授です」

坂本晴臣（62）、お辞儀をする。

坂本「坂本です。後ろにいるのは僕のゼミの学生です」

ゼミ生たち、お辞儀をする。

あすか「教授は国内外で様々な遺跡の発掘に関わって来ました」

タブレットでネットニュースの記事を見せたり、著書を出すゼミ生たち。

坂本「本日は大変貴重な歴史的資料を見せていただけるとの事で馳せ参じました」

貝塚、呆れてうなだれる。

貝塚「……好きにしろ」

鞆からビニール袋を出す。

坂本とゼミ生、熱心に土器を見る。

昭一郎「矢部さん、ありがとう！」

深々とお辞儀をする。

あすか「こちらこそです、岩田さん」

あすかもお辞儀をする。

大河「何が何だか全然わかんなかった」

慶子「私もだよ」

大河「でも……何か、良かったね」

慶子「うん、悪くはなかったね」

慶子と大河、笑う。

貝塚、昭一郎の前に立つ。

貝塚「岩田課長補佐……わかってるよね？」

昭一郎「サヨナラニッポン、ですよね」

貝塚、頷く。

昭一郎「覚悟は、出来てます」

○農道

『三年後』のテロップ。

明らかに日本じゃなさそうな人気のない農道。

太陽の強い光が照っている。

ボロボロの軽トラが一台通って行く。

○更地・前

何もない広大な更地。

軽トラが停まる。

アロハシャツ姿の昭一郎（45）が降りてくる。

日焼けし、ヒゲを伸ばしている。

助手席から降りる慶子（44）。

荷台から降りる大河（15）

慶子「今日何度？」

大河「確か最高で三十六度かな」

慶子「何それ、人の平熱じゃない」

軽トラからラジオが流れている。

どこかの国の知らない言葉の歌。

慶子「何なの、重大発表って」

昭一郎「マイホーム、ここにしようと思うんだ」

大河「やっと借家から解放されるんだ」

慶子「ええっ、東京庭付き一戸建ては？」

昭一郎「良いだろ、ここだって一応ギリギリ

日本なんだからさ」

ラジオの声「という訳で本日は中米の音楽特集をお送りしました。この後はゲストコーナー」

慶子「ギリギリ過ぎるでしょ。葉良磯島なんて、来るまで知らなかったもの」

昭一郎「でも住んでみたら意外と楽しいだろう？」

慶子「まあ、嫌いじゃないけどさ」

軽トラのダッシュボードの上に乗って

いる日焼けした名刺に『葉良磯島はらいそじま 新規

事業開拓部長 岩田昭一郎』と書かれ

ている。

ラジオの声「三年前に日本史を変える大発見をした考古学者坂本晴臣教授と矢部はるか主任研究員に考古学の魅力をたっぷり語ってもらいましょう」

大河、更地の上を歩き、土を触っている。

昭一郎と慶子も更地の上に立つ。

心地良い風が吹く。

大きく伸びをする昭一郎。

少し離れた場所に居た大河が走ってくる。

大河「ねえ、お父さん！」

昭一郎「何だ？」

大河「また日本の歴史、変わるかも」

慶子も歩いてくる。

昭一郎「……へ？」

大河の手のひらにいくつかの石片。

苦笑いする昭一郎と慶子の顔。

完